

近江商人吉村儀兵衛家の経営

—本店を中心に—

Management of Yoshimura Family as an Omi Merchant:
Focused on the Property Trend of the Center Store

上 村 雅 洋

Masahiro UEMURA

はじめに

吉村儀兵衛家は、近江商人の中でも八幡商人や五個荘商人とは異なり、日野商人と呼ばれる商人に属していた。日野商人の特徴は、日野椀・合葉などの持ち下り商品、「日野の千両店」と称される積極的な多店舗展開、合葉製造・醸造業などの製造部門の包摂、近江商人ネットワークとしての大当番仲間の存在などにあるとされてきた。吉村儀兵衛家については、すでに近江国蒲生郡小谷村を本拠地とし、下野国芳賀郡谷田貝（久下田）において酒造業を営み、さらに多くの出店を関東周辺地域に設け、活動していた近江商人であることが知られており、これまで吉村儀兵衛家の関東での酒造業展開の概観⁽²⁾、雇用形態について明らかにしてきた。吉村儀兵衛家は、酒造業を中心に、関東において久下田にある本店と上ノ店のほかに、鷺巣店、柿岡店、横堀店、恩名店、下妻店などの出店を構えていた⁽⁴⁾。

本稿の目的は、吉村儀兵衛家の中核の出店である久下田店（本店）の酒造経営を中心に、吉村儀兵衛家の資本蓄積の動向を近代に至るまでできるだけ長期的に把握することにある。

-
- (1) 拙著『近江日野商人の経営史的研究』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書，2006年），駒井正一『日野商人—隠れたる北関東での謎—』（同，2001年），拙著『近江商人の経営史』（清文堂出版，2000年），拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」（安藤精一・高嶋雅明・天野雅敏編『近世近代の社会と経済』清文堂出版，2009年），『近世・近代における商業資本発達史の研究—近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究—』（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 研究代表者 筒井正夫，2006年），『近江蒲生郡志』巻5（滋賀県蒲生郡役所，1922年），『近江日野町志』巻中（滋賀県日野教育会，1930年）など。
- (2) 前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」。
- (3) 拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の雇用形態」（1）（2）（和歌山大学『経済理論』第353号・第354号，2010年）。ほかに吉村家については，二宮町史編さん委員会編『二宮町史』通史編Ⅱ 近世（二宮町，2008年）に詳しい。
- (4) 前掲『二宮町史』通史編Ⅱ，437頁。これらの出店の経営については，別稿を用意している。

1 創業期の経営

前稿で明らかにしたように、吉村儀兵衛家が、関東へ第一歩を踏み入れたのは、元文4年⁽⁵⁾ (1739)であり、当初は帷子・日野椀などの持ち下り商いを行っていたようである。そこで、この時期にあたる元文4年から延享3年 (1746) までの8年間の勘定を「年々勘定之覚」⁽⁶⁾によって示したのが、表1である。この表によれば、初年にあたる元文4年には「文金」12両1分から内「諸色遣払」7両を引いた「残而」5両1分の利益をあげ、その後毎年13～14両の利益を得、延享2年は休業したものの、同3年には60両近い利益を得ていたことがわかる。この間、寛保2年 (1742) 8月には関東地方で大洪水が発生したようであるが、前稿で明らかにしたように、この時期に帷子・日野椀の売掛金などの資産が吉村儀兵衛家に蓄積されていた。

こうして10年間で蓄積した資本を用いて、酒造業に乗り出していった。⁽⁷⁾ 下野国芳賀郡久下田に店を設けたのは、寛延2年 (1749) のことであり、この時に久下田で酒造業を開始したようである。なお、本店は、「久下田店」「久下田本店」「丸天店」などと称され、店名前は「天満屋儀右衛門」であった。

表1 吉村儀兵衛家創業期の経営勘定

年 代	金	内	残 而	備 考
元文4年 (1739)	12両1分	7両	5両1分	
元文5年 (1740)	16両3分・800文	8両1分	8両2分・800文	
寛保元年 (1741)	22両3分	8両3分	14両	
寛保2年 (1742)	22両2分	9両2分	13両	此年者関東八月大水出し候
寛保3年 (1743)	23両2分	10両1分	13両1分	外ニかたひら残り物 13両1分2朱有
延享元年 (1744)	27両2分	13両1分	14両1分	外ニかたひら残り物 27両2分有
延享2年 (1745)				相休申候
延享3年 (1746)	81両	21両2分	59両2分	外ニかたひら残り物 金36両1分と12匁有

(注) 延享4年正月「ゑ美酒」(日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

(5) 前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」201～202頁。

(6) 「年々勘定之覚」(延享4年正月「ゑ美酒」日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)。

(7) 吉村儀兵衛家が、久下田で酒造業を営むことになった経緯について、次のようなことが別途伝えられている。蒲生郡鋳物師村出身の近江商人で、久下田店の隣家竹村家の中興の祖である行秀(茂兵衛、享保17年～文化10年)の話として「行秀様の親御迄八至而之貧家たりしに、行秀様^(元文4年)八歳の時日野町島崎氏へ丁稚奉公御勤、此折柄小谷村吉村氏此家の養子たりしに、故有て此家を出給ふの時、行秀様の幼年ニして常ならぬ生立に目をとめ、深く執心して一緒に連出、夫より大坂辺を漂泊し、後年野呂久下田におゐて酒蔵を取立天満屋といたし、吉村氏の店を取立給ひしか根元と成て、御仕出しなされ」(竹村家文書)とあるように、吉村儀兵衛は、日野町の島崎家の養子となったが、同家へ奉公に来ていた行秀とともに家を出て、大坂辺りを漂泊の後、久下田で酒造業を始めたという。なお、竹村家については、蒲生町史編纂委員会編『蒲生町史』第2巻 近世・近現代(蒲生町、1999年、290～292、679～681頁)、前掲『二宮町史』通史編Ⅱ(438～441、452～457頁)、二宮町史編さん委員会編『二宮町史』通史編Ⅲ 近現代(二宮町、2008年、270～277頁)に詳しい。

表2 吉村儀兵衛家本店資産額（寛延3年～天明2年）

年 代	元 金	造 酒 米	利 金	内 質 方 利
寛延3年（1750）	352両1分・450文	257石2斗4升	8両2分	
宝暦元年（1751）	252両・500文	298石2斗8合	76両	
宝暦2年（1752）	275両1分・230文	287石1斗6升	86両2分・800文	
宝暦3年（1753）	305両3分・872文	270石	34両3分・4貫171文	
宝暦4年（1754）	216両2分・420文	330石	45両2分・776文	
宝暦5年（1755）	257両・328文	314石8斗	53両1分・980文	
宝暦6年（1756）	320両2分・200文	248石2斗	50両・80文	
宝暦7年（1757）	347両・2貫842文	312石8斗5升	54両850文	
宝暦8年（1758）	348両・1貫865文	290石	35両853文	
宝暦9年（1759）	383両2分・522文	251石3斗	52両1分・210文	
宝暦10年（1760）	243両2分・1貫32文	265石4斗	34両2分・41文	
宝暦11年（1761）	367両・1貫373文	362石	84両1分・259文	
宝暦12年（1762）	381両3分・2貫312文	397石	56両2分・1貫9文	
宝暦13年（1763）	440両3分・4貫521文	310石2斗5升	27両1分・600文	
明和元年（1764）	486両2分・2貫811文	331石	139両・60文	
明和2年（1765）	309両3分・750文	342石	71両3分・65文	
明和3年（1766）	358両・2貫550文	470石	100両1分・686文	
明和4年（1767）	467両・2貫521文	340石2斗	106両1分・450文	
明和5年（1768）	394両2分・1貫512文	384石5斗	80両3分・660文	
明和6年（1769）	427両3分・888文	397石5斗	55両3分・886文	
明和7年（1770）	419両・400文	396石9斗	121両3分・484文	
明和8年（1771）	532両3分・1貫78文	430石2斗2升	91両	
安永元年（1772）	558両・2貫600文	466石8斗4升	35両2分・676文	
安永2年（1773）	483両3分・1貫149文	565石1斗5升	82両・1貫152文	
安永3年（1774）	654両3分・10貫文	468石9斗1升	86両1分・508文	18両3分・318文
安永4年（1775）	715両3分・1貫208文	555石5斗4升	149両3分920文	34両3分・1貫281文
安永5年（1776）	746両2分・506文	472石9斗	157両3分・11貫11文	24両1分
安永6年（1777）	740両1分・1貫267文	578石8斗	130両1分・205文	5両
安永7年（1778）	725両2分・293分	630石	100両1分・18文	1両3分2朱
安永8年（1779）	785両3分・802文	520石	90両2分・939文	
安永9年（1780）	888両2朱・1貫450文	436石4斗	47両2朱・362文	
天明元年（1781）	607両1分・26文	575石6斗5升	92両・564文	
天明2年（1782）	688両1分2朱・688文	654石	83両1分2朱・236文	

（注） 天明2年12月「万目録」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）より作成。

この久下田店開店の寛延2年から天明2年（1782）までの33年間の資産動向が、天明2年12月の「万目録」⁽⁸⁾によって明らかになる。そこで、その間の元金、酒造米、利金について示したのが、表2である。例えば、表中の寛延3年は、前年から始め同年の秋までの勘定を示している。したがって、天明2年は同元年から同2年の秋までの勘定となる。

この表によれば、寛延3年には元金352両1分・450文、酒造米は257石2斗4升、利金は8両2分であり、初年度は350両程度の元金で酒造業を開始し、利金もわずかであった。元金は、宝暦12年（1762）までは200～400両であったが、同13年には400両を超える元金に増

（8）天明2年12月「万目録」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）。

加している。明和8年(1771)には500両を、安永3年(1774)には600両を、同4年には700両を超えている。そして、安永9年には888両2朱・1貫450文となり、急激にその金額を増加させているのがわかる。それに伴い、酒造米も寛延3年には257石余であったのが、その後300石前後を維持しながら着実に増加し、明和8年には400石を超え、それ以降500～600石に増加し、天明2年には654石にまで及んでいる。利金は、寛延3年の8両2分に始まり、宝暦13年までは50両前後であったが、明和元年には139両・60文と100両を超える利金を獲得し、それ以降は毎年100両前後の利金を得ている。

また、安永3～7年には質方利としてある程度の金額が上げられており、質屋業も営んでいたように思われるが、その金額は少なく、時期的にも限定されており、内々に行われていたものと思われる。実際に久下田店で質屋業が営まれるのは、文政8年(1825)8月の「質稼初年代書上届控」⁽⁹⁾によれば、「寛政元己酉年と質屋始メ」「質屋稼仕候、是者寛政元之頃と相初メ」とあり、また天保9年(1838)8月の「質屋渡世ニ付書上控」⁽¹⁰⁾にも、「五十年以前、寛政元己酉年と質屋相始」と記されており、寛政元年(1789)から行っていたようである。⁽¹¹⁾

この「万目録」では、「壺番、巳秋始午秋勘定と卯秋迄中拾年」として寛延3年～宝暦9年の当初10年間、「貳番、辰秋勘定と辰秋勘定迄中拾三年」として宝暦10年～安永元年の13年間、「壺貳、巳秋始午秋勘定と辰勘定迄中廿三年」として寛延3年～安永元年の23年間、「三番、巳秋勘定と寅秋勘定迄中年拾年」として安永2年～天明2年の10年間というように、ほぼ10年刻みで久下田店開設以来の勘定を集計し、経営動向を把握しようとしている。

それによれば、「壺番」である最初の10年間は、「元金」3059両2分・538文、「造酒米」2859石7斗5升8合、「利」497両2分・1貫33文とあり、「貳番」である次の13年間は、「元金」5391両2分・607文、「造酒米」4893石8斗1升、「利」970両・6文であった。さらに、「三番」である次の10年間は、「元金」7038両3分・1貫188文、「造酒米」5414石6斗(代金4237両3分余)、「利」1020両1分・33文(内「質利」84両3分2朱)、「造酒売高取上」8188両1分・1貫9文であったと記されている。

これら寛延3年から天明2年にいたる33年間におよぶ「壺番」「貳番」「三番」の3期間における1年平均の数値動向を見ると、元金は305両3分・770文余から414両2分・952文余、さらに703両3分余へ、造酒米は285石9斗7升5合8勺から376石4斗4升6合9勺、さらに541石4斗6升へ、利は49両2分・990文から74両2分・500文、さらに102両余へ、それぞれ増加した。特に「貳番」から「三番」への時期の増加率が高く、明和・安永期に規模が

(9) 文政8年8月「質稼初年代書上届控」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。

(10) 天保9年8月「質屋渡世ニ付書上控」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。

(11) 吉村家の質屋業は文化年間から急速に拡大していったようであり、寛政8年には366両であった年間の取質高は、文化4年以降1000両を超え、文政8年には2000両を超える額となり、文化期以降は毎年60～70両を超える利益をあげ、安定した利益を吉村家にもたらしたとされている(前掲『二宮町史』通史編Ⅱ、450頁)。

拡大し、「三番」の時期は「壺番」の時期の2倍の規模に達している。

また、「三番」の時期の酒造米の1年平均代金が423両2分余であり、一方造酒売高の1年平均が818両3分余であることから、造酒によって約2倍弱の価値を生み出していたことがわかる。したがって、基本的には酒造規模（酒造米）の拡大が売上高の拡大となり、利益の拡大、経営の拡大につながっていったようである。

こうした動向は、前稿で述べた吉村儀兵衛家が宝暦8年に谷田貝町の伝右衛門から酒蔵を借り受け酒造業を行い、明和9年にはその酒造株を入手し、本格的な酒造経営に乗り出して行く状況をそのまま反映しているものであった。

2 酒造経営の本格的展開

次に、延享4年正月の「⁽¹³⁾ 叅美酒」を用いて、その後の吉村儀兵衛家の動向を見ておきたい。この史料の冒頭部分には、前述した元文4年から延享3年までの8年間の勘定を記した「年々勘定之覚」があり、それに続いて表3のような天明元年から天保6年に至る資産額と考えられる数値が記されており、それをここでは拾い上げた。この表から55年間の数値が得られる。文政4～8年と10年の6年分が欠けているものの、この間の長期的な経営動

表3 吉村儀兵衛家本店資産額（天明元年～天保6年）

年 代	元金（有物 ^ベ ）
天明元年（1781）	1963両
天明2年（1782）	2126両
天明3年（1783）	2289両
天明4年（1784）	1464両2分
天明5年（1785）	1491両
天明6年（1786）	1621両3分
天明7年（1787）	1691両2分
天明8年（1788）	1591両
寛政元年（1789）	1645両
寛政2年（1790）	1658両2分
寛政3年（1791）	1740両3分2朱
寛政4年（1792）	1860両1分
寛政5年（1793）	1967両3分
寛政6年（1794）	2024両1分2朱
寛政7年（1795）	2163両2分
寛政8年（1796）	2275両2分
寛政9年（1797）	2085両1分2朱
寛政10年（1798）	2276両3分
寛政11年（1799）	2445両3分2朱
寛政12年（1800）	2926両2分2朱
享和元年（1801）	3106両1分
享和2年（1802）	3474両2分
享和3年（1803）	3455両1分
文化元年（1804）	3188両1分
文化2年（1805）	3171両3分
文化3年（1806）	3298両2分2朱
文化4年（1807）	3442両1分2朱・1貫282文
文化5年（1808）	3487両3分2朱
文化6年（1809）	3580両
文化7年（1810）	3699両2分・244文
文化8年（1811）	3880両・475文
文化9年（1812）	3907両1分・29文
文化10年（1813）	4016両3分
文化11年（1814）	4114両1分2朱
文化12年（1815）	4275両1分・515文
文化13年（1816）	4384両・1貫420文
文化14年（1817）	4215両3分・824文
文政元年（1818）	4320両3分・836文
文政2年（1819）	4390両3分2朱
文政3年（1820）	4117両1分2朱
文政9年（1826）	5195両1分・14貫13文
文政11年（1828）	6282両2分2朱・25貫647文
文政12年（1829）	7114両2分3朱・22貫513文
文政13年（1830）	7544両1分2朱・30貫250文
天保2年（1831）	7767両2朱・永313文4分・31貫249文
天保3年（1832）	8121両2分2朱・永561文5分・35貫248文
天保4年（1833）	8381両3分・永31文9分・36貫115文
天保5年（1834）	9119両2朱・永594文4分1厘・32貫383文
天保6年（1835）	9788両3分1朱・30貫182文

（注）延享4年正月「叅美酒」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）より作成。
 天明元～7年は「惣」、天明8～文政3年は「元金」、文政9～天保6年は「有物^ベ高」の数値を代表させた。

（12）前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」。

（13）前掲延享4年正月「叅美酒」。

向がうかがえる。天明元～7年は「惣」、天明8年～文政3年は「元金」、文政9年～天保6年は「有物ペ高」と記されている数値を表記した。

この史料の数値は、たとえば「ケ丸ヨ谷ク上テ両貳分」というように、いわゆる符牒で書かれており、この符牒は幕末期に至るまで多くの帳簿において全面的に使用されている。それを解読すると、まず1～9までは、順に1は「サ」、2は「ケ」、3は「テ」、4は「キ」、5は「ヨ」、6は「ク」、7は「ウ」、8は「レ」、9は「ル」と判断され、続けると「酒出来よく売れる」となり、まさに吉村家の家業である酒造業に相応しい符牒となっている。さらに、10は「上」、100は「谷」、1000は「丸」、10000は「玉」となり、それぞれ「拾」「百」「千」「万」の代わりに使用されている。ただし、これらの符牒は、金の単位を示す両以上の数字に用いられ、金の端数である分・朱や銭の文の単位には使用されず、それらは普通の数字表記となっていた。したがって、両以上の金額の多い、重要な数値にのみ符牒が使用されていたといえる。

この表3によれば、天明元年には1963両の元金が計上され、この時期にはある程度まとまった資金が蓄積されてきたことがうかがえる。しかし、寛政6年以降になるまでは、天明2～3年には2000両を超える元金が見られたものの、1500両から2000両の間を上下し、大きな増加は見られない。寛政6年に2024両1分2朱となると、順調に増加を続け、享和元年(1801)には3000両を超える額となり、その後着実な増加を見せ、文化10年(1813)には4000両を超える。そして、文政9年には5000両、同11年には6000両、同12年には7000両、天保3年には8000両、同5年には9000両を超えて、急激に資産を増加させ、同6年には1万両近くにまで達した。すなわち、文化期の後半から天保期にかけて、急激な成長を見ることができた。

それは、前稿で述べた寛政元年の質屋業の開始、寛政5年の酒造株の入手、文政7年の鷺巣店への出店、天保4年の拝借株の申し出に見られるような積極的な経営拡大の姿勢と連動するものであった。⁽¹⁴⁾

次に、表4によって、寛政3年～文化元年の造酒米高と売上高⁽¹⁵⁾の状況を少し見ておこう。造酒米高は、550～750石前後の規模でほぼ一定している。それにともない売上高は1000～1450両であり、売上高は1石当たりの酒価格によって左右されるため、必ずしも造酒米高とは連動していない。しかし、売上高は造酒米高のほぼ倍ぐらいの数値を両換算したものであ

(14) 前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」。

(15) 前掲『二宮町史』通史編Ⅱでは、「勘定帳」に基づき安永元年から天保2年までの造酒米買入高と売高取上額の変遷(一部欠年あり)が明らかにされ、以下のような結果を得ている。すなわち、造酒米買入高は、寛政4年～享和3年(862～1076石)と文政11～天保初年(921～1137石)に比較的多く、文化期～文政期前半(264～629石)には比較的少ないこと、売高取上額もほぼ同様の傾向(1050～1442両、1019～1382両、448～994両)が見られること、大飢饉の天明3年(115石、188両)には22～23%程度の落ち込みが見られることなどを指摘している(448～449頁)。

ることがわかり、これによつて吉村儀兵衛家の久下田店における酒造経営の規模がある程度うかがえる。

前述した表3の吉村家の資産額と一部重なるが、文政11年正月「勘定帳」⁽¹⁶⁾と天保10年正月「勘定帳」⁽¹⁷⁾に基づいて、文政11年～天保15年の17年間に於ける吉村家の資産額を示したのが、表5である。この表によれば、文政11年に

6532両余であった資産が、毎年500両程度も大きく増加し、天保7年には1万両を超え、同10年には1万1424両余にまで達した。その後はやや停滞しているものの、ほぼ1万両前後を維持しているのがわかる。質方⁽¹⁸⁾有物については、文政11年の1734両1分・234貫247文から着実に増加し、天保3

年には2000両を超え、同4年には2565両2分3朱・674貫925文にまで達し、その後同15年まで2200～2300両前後を維持した。このように、久下田店にとって質方稼ぎもこの時期には酒造業と並びある程度大きなウエイトを占め、吉村儀兵衛家の経営を安定させるのに寄与していたよう

表4 吉村儀兵衛家本店造酒米高・売上高

年 代	造酒米高	売 上 高
寛政3年(1791)	574石6斗4升	1034両2朱・537文
寛政4年(1792)	566石5斗	1393両2分2朱・5貫500文
寛政5年(1793)	704石8斗	1442両1分・1貫102文
寛政6年(1794)	646石9斗6升	1287両1分2朱・546文
寛政7年(1795)	682石2斗1升	1268両2分2朱・371文
寛政8年(1796)	685石9斗7升	1217両2分2朱・724文
寛政9年(1797)	657石9斗	1153両2分・464文
寛政10年(1798)	711石8斗	1199両・755文
寛政11年(1799)	679石6斗6升	1302両3分2朱・63文
寛政12年(1800)	691石2斗8升	1406両1分・472文
享和元年(1801)	728石2斗	1268両・122文
享和2年(1802)	698石7斗7升	1183両・161文
享和3年(1803)	759石3斗	1050両1分・388文
文化元年(1804)	629石3斗6升	

(注) 寛政10年「造酒勘定改」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

表5 吉村儀兵衛家本店資産額(文政11年～天保15年)

年 代	合 計 (資産額)	内 質方有物 ^ベ
文政11年(1828)	6532両3分・789文	1734両1分・234貫247文
文政12年(1829)	7230両3分2朱・260文	1813両1分2朱・338貫467文
文政13年(1830)	7880両1分1朱・416文	1872両2分2朱・445貫161文
天保2年(1831)	8426両3朱・62文	1979両1分1朱・516貫770文
天保3年(1832)	8883両2分3朱・501文	2169両3朱・613貫460文
天保4年(1833)	9168両・553文	2565両2分3朱・674貫925文
天保5年(1834)	9515両・245文	2252両2朱・776貫614文
天保6年(1835)	9641両2分3朱・107文	2281両2分1朱・849貫700文
天保7年(1836)	10016両1朱・670文	2213両3分・877貫238文
天保8年(1837)	9602両3分2朱・23文	2361両2分1朱・992貫924文
天保9年(1838)	10323両2分3朱・115文	2030両1朱・970貫864文
天保10年(1839)	11424両1分2朱・338文	2134両1朱・905貫638文
天保11年(1840)	10115両3分3朱・979文	2251両1分1朱・833貫765文
天保12年(1841)	10359両3分2朱・834文	2346両1分・787貫8文
天保13年(1842)	9909両1分3朱・567文	2358両2分2朱・758貫946文
天保14年(1843)	10109両2分3朱・228文	2341両2朱・873貫108文
天保15年(1844)	10391両2朱・145文	2168両1分・920貫225文

(注) 文政11年正月「勘定帳」・天保10年正月「勘定帳」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)より作成。

(16) 文政11年正月「勘定帳」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。

(17) 天保10年正月「勘定帳」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。

(18) 文政8年「酉戌亥三ヶ年質物金高覚」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)によれば、質物金高として、文政8年には2374両2朱・394文、同9年には2446両3分2朱・134文、同10年には2059両・559文であり、酒造業の4分の1から3分の1を占める経営規模を備えていたことがわかる。

である。それは、久下田店を描いた文政8年の「⁽¹⁹⁾ 亀絵図」において質蔵が3つも存在し、酒造蔵と同様に久下田店で大きなスペースを占めていたことからもうかがえる。

最後に、文化元年以降の残存する各年の「造酒諸勘定目録」⁽²⁰⁾などを拾い上げ、昭和5年に至るまで、できるだけ連続して吉村家の久下田店(本店)の資産額を並べたのが、表6である。文化14年以降の勘定帳には春勘定と秋勘定と二度記載されている場合が見られたが、秋勘定を優先させて取り上げた。秋勘定のデータが得られない場合は、春勘定で代替した年もある。⁽²¹⁾

この表によれば、文化元年に2396両3分・436文あった資産が、文化8年には3000両を超え、同9～10年には2000両台に低下したものの、同11年以降は着実に増加している。文政元年には、4000両、同9年には6000両、天保2年には8000両、同4年には9000両を超え、大きく資産の増加を図り、同7年には1万908両2分1朱・805文と1万両の大台に達したのである。その後9000両台にとどまるものの、弘化元年(1844)には再び1万両台を突破した。そして、弘化3年には1万1000両を超え、嘉永元年(1848)には1万2037両2分・477文となり、安政3年(1856)まではほぼ1万2000両台を保ち、久下田店の最高額の資産を計上するに至るのである。

ところが、安政4年には4300両・永855文と急激に資産が減少する。その理由としては、さまざまなことが考えられるが、それを説明するような決定的な記述が、現在のところ史料的にも見当たらない。一般に考えられるのは、地震や火事などの自然災害によるものである。地震は、安政の大地震があるが、これは安政2年10月に起こったもので、しかも江戸に大被害をもたらした「安政江戸地震」と呼ばれるものであり、⁽²²⁾下野国芳賀郡久下田まで直接的な被害をもたらすものではない。火事は、久下田で頻繁に発生し、吉村儀右衛門家の火災見舞いの施行記録によれば、⁽²³⁾宝暦13年、天明3年、寛政11年、享和3年、天保15年、弘化2年、慶応2年(1866)に火災施行がなされている。しかし、いずれも吉村家の久下田店が類火に襲われたとは記されていない。⁽²⁴⁾ただ、天保15年正月の火事で、「同十四日夜九つ時、上ノ

(19) 文政8年6月「亀絵図」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。この天満屋儀右衛門店屋敷図は、前掲『二宮町史』通史編Ⅱの口絵にも掲載されている。ほかに、文化5年7月の屋敷図もあり、同様に酒蔵・米蔵・質蔵などが描かれている。

(20) 「造酒諸勘定目録」は、栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書と日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書の双方に残存し、本稿の表は相互に補完しながら作成した。また、それ以外の類似の勘定帳などもできるだけ活用した。

(21) たとえば、元治元年の春改では7288両・永715文7分8厘の資産額(文久4年「造酒諸勘定目録」日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書)であったが、秋勘定では6557両・永948文3分1厘9毛(文久4年「造酒諸勘定目録」栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)となっている。もちろん、春改とか秋勘定とかははっきりしない場合は、そのままの数値を採用した。

(22) 北原糸子『地震の社会史』(講談社、2000年)。

(23) 寛政10年「諸色記」(栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書)。

(24) 前掲『二宮町史』通史編Ⅱ、391～394頁。

店自火ニ而酒蔵、醬油蔵、穀蔵、諸道具不残焼失、質蔵壺ケ所相残り、尤其夜外ニ式軒焼失有之候得共、別火之趣ニ而類焼なし御見分相済⁽²⁵⁾」とあり、吉村儀兵衛家の上ノ店が質蔵を残して、酒蔵などを焼失していることがわかる。ところが、表6からも明らかなように同年に大きな資産額の落ち込みは見られず、本店である久下田店の経営に直接影響はしていないようである。

そこで、安政4年の「巳年諸勘定目録」⁽²⁶⁾をよく見ると、春改に対し「安政四丁巳春再勘定」がなされ、そこに「酒六百石七斗五升、酸ニあり」と記され、この年に腐造があったことがわかる。しかし、その代金は「七百八拾兩ト永百九十四文八分」であり、金額的にも本店の資産額を大きく減少させる要因としては弱い。また、質方有物も前年の1616兩2分1朱・257貫447文から同年には387兩2分1朱・124貫711文と資産額と同様に急激な減少が見られる。したがって、腐造による落ち込みとも考えにくいし、造酒米高も大きな変化は見られない。

最後に考えられるのは、表6からもわかるように、安政3年までは「兩、分、朱」の金勘定の後に銭勘定として「文」が端数として記録されているが、安政4年からは金勘定の「兩」と永勘定の「永、文、分、厘、毛」に記載形式が変わっている。これは、元金の勘定においても同様になっており、本店の酒造経営における会計上の何らかの処理をしたと考えた方がよさそうである。⁽²⁷⁾

酒造米高については、文化元年から安政3年の間では、最大が文政3年の961石1斗で、最小は天保10年の430石2斗であり、ほぼ600～800石に収まっている。これは、久下田店において1蔵による醸造がおこなわれていたことを裏付けるものである。

元金は、その店の元手金（資本金）に当たるもので、資産額に応じて変動している。比較的古い時期の元金は、資産額との乖離が少ないが、時期が経つにつれて、乖離が大きくなっている。その趨勢は、資産額の動向とほぼ平行に動いており、久下田店の経営動向を把握することができる。文化元年には2031兩3分・637文であったのが、文化13年には3068兩余、文政6年には4146兩余、天保2年には5170兩余、同7年には6320兩余、同11年には7113兩余、嘉永6年には8142兩余となり、安政2年には8528兩・22文にまで達している。

質方有物は、文化元年には455兩1分・550文であったが、同11年には1114兩余に達した。

(25) 前掲寛政10年「諸色記」。

(26) 安政4年「巳年諸勘定目録」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）。

(27) 安政3年8月には、酒造労働の給金が改定されており（前掲拙稿「近江商人吉村儀兵衛家の雇用形態」（2）95頁）、また安政7年正月「店用給金帳」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）の冒頭部分に掲げられている「心得」にも「安政三辰年より相改在所入用金ハ此方ニ而口々々々高帳合致、店方より毎年八月改貸金へ高取調為相登国方ニ而給金差引可致事」とあり、安政3年に給金や帳合を含めた何らかの家政改革が実施された結果かも知れない。しかしながら、現時点では確たる証拠はなく、依然として不明としか言いようがない。

表6 吉村儀兵衛家本店資産額（文化元年～昭和5年）

年 代	資 産	元 金	質 方 有 物	造 酒 米 高
文化元年 (1804)	2396両3分・436文	2031両3分・637文	455両1分・550文	
文化4年 (1807)	2468両1分・131文	2074両3分2朱・6貫783文	627両1分・665文	874石6斗
文化5年 (1808)	2461両2分・583文	2057両1分2朱・2貫272文	824両・3分	785石6升
文化6年 (1809)	2919両1分2朱・341文	2462両3分・5貫230文	991両1分・385文	744石9斗
文化7年 (1810)	2908両1朱・675文	2390両2朱・76文	1031両1分2朱・217文	667石5斗
文化8年 (1811)	3163両・658文	2736両1朱・682文	899両3分・81貫622文	767石2斗1升
文化9年 (1812)	2885両2分・342文	2487両1分・7貫819文	911両3分・17貫372文	759石5斗
文化10年 (1813)	2897両2分・594文	2777両2分・550文	990両2分・322貫654文	778石7斗4升
文化11年 (1814)	3185両1分2朱・357文	2683両2朱・658文	1114両2分2朱・173貫529文	797石1斗
文化12年 (1815)	3263両3分2朱・118文	2745両2分2朱・669文	1067両・61貫668文	744石7斗
文化13年 (1816)	3584両・32文	3068両3分2朱・458文	1224両1分・54貫487文	769石6斗
文化14年 (1817)	3453両1分・417文	3324両2分・1貫581文	1403両・229貫772文	793石8斗2升
文政元年 (1818)	4357両・834文	3900両1分・672文	1385両2分2朱・420貫508文	732石6斗
文政2年 (1819)	4250両1分・90文	3335両1朱・354文	1318両2朱・257貫710文	736石3斗
文政3年 (1820)	4352両2分・172文	3410両1分2朱・1貫82文	1365両・211貫167文	961石1斗
文政4年 (1821)	4507両・562文	3481両1分2朱・21文	1499両1分2朱・363貫675文	829石2斗5升
文政5年 (1822)	5027両・578文	3862両1分・591文	1554両・238貫458文	818石3斗
文政6年 (1823)	5231両3分・235文	4146両1分・512文	1831両3分・211貫527文	787石6斗
文政7年 (1824)	5527両1分・606文	3925両1分・341文	1920両・246貫831文	761石4斗
文政8年 (1825)	5882両1分2朱・668文	4217両1分・247文	1981両1分2朱・165貫841文	867石8斗
文政9年 (1826)	6462両2分・526文	4306両3分2朱・620文	1866両2分・224貫175文	725石2斗
文政10年 (1827)	6424両・228文	4263両1分2朱・394文	1638両1分・247貫623文	841石1斗
文政11年 (1828)	6817両2分1朱・625文	4331両1分3朱・95文	1699両3朱・361貫415文	888石2斗
文政12年 (1829)	7303両3分3朱・327文	4593両1朱・4貫738文	1739両3分3朱・473貫350文	753石3斗
天保元年 (1830)	7481両2分2朱・114文	4746両3朱・4貫404文	1869両3分2朱・550貫432文	813石3斗
天保2年 (1831)	8352両3朱・550文	5170両1朱・236文	2031両3分3朱・646貫734文	793石1斗
天保3年 (1832)	8816両2分・584文	5507両2分・584文	2173両3分3朱・735貫227文	706石7斗
天保4年 (1833)	9144両3分1朱・527文	5661両3分3朱・258文	2144両1分2朱・756貫175文	701石1斗
天保5年 (1834)	9563両3分3朱・263文	5967両2分2朱	2200両3朱・905貫214文	498石1斗2升
天保6年 (1835)	9652両2分1朱・630文	5993両2分2朱・383文	2225両3分1朱・930貫466文	701石3斗5升
天保7年 (1836)	10908両2分1朱・805文	6320両3分1朱・562文	2297両2分・948貫211文	634石6斗
天保8年 (1837)	9549両2分・392文	6182両2分・151文	2210両3分3朱・1048貫360文	
天保9年 (1838)	10539両1分・109文	6187両3分・1貫807文	2211両3分3朱・977貫157文	511石6斗8升
天保10年 (1839)	9445両3分1朱・289文	4791両1分・736文	2331両2分3朱・879貫278文	430石2斗
天保11年 (1840)	9660両2分3朱・114文	7113両1分1朱・174文	2283両2朱・799貫853文	715石9斗
天保12年 (1841)	9996両・569文	7631両3分2朱・1貫39文	2380両3朱・789貫277文	707石6斗
天保13年 (1842)	9909両1分3朱・567文	7400両3分2朱・502文	2358両2分2朱・758貫945文	766石9斗
天保14年 (1843)	9558両1朱・783文	7302両2朱・1貫80文	2334両1朱・977貫926文	704石1斗
弘化元年 (1844)	10266両1分3朱・160文	7499両2朱・384文	2260両3分3朱・946貫853文	634石2斗
弘化2年 (1845)	10927両3分2朱・39文	7633両1分2朱・347文	2284両1分・926貫341文	556石2斗
弘化3年 (1846)	11155両2分2朱・653文	7766両2分・332文	2109両1分1朱・875貫60文	436石1斗
弘化4年 (1847)	11403両3分1朱・554文	7813両・1貫183文	2052両2分・741貫474文	645石7斗
嘉永元年 (1848)	12037両2分・477文	7630両2分・206文	2071両1分・708貫756文	701石2斗
嘉永2年 (1849)	11524両1朱・335文	7709両2分・1貫189文	1722両2分3朱・533貫75文	680石6斗
嘉永3年 (1850)	11871両3分1朱・660文	7870両3朱・2貫794文	1664両3朱・496貫779文	640石1斗
嘉永4年 (1851)	12036両2分3朱・780文	7843両3分1朱・1貫91文	1691両3朱・444貫591文	495石7斗
嘉永5年 (1852)	12578両2朱・145文	7919両2分3朱・511文	1729両3分・438貫817文	708石8斗
嘉永6年 (1853)	12761両1分・738文	8142両2分・3貫965文	1739両・432貫474文	679石6斗4升
安政元年 (1854)	12618両3分・564文	8447両3分・185文	1721両3分2朱・412貫800文	547石5斗
安政2年 (1855)	12394両3分2朱・215文	8528両・22文	1703両3分・344貫469文	758石
安政3年 (1856)	12504両1分1朱・372文	8518両1分・5貫337文	1616両2分1朱・257貫447文	649石1斗8升
安政4年 (1857)	4300両・永855文	1514両・永792文9分7厘	387両2分1朱・124貫711文	840石6斗8升
安政5年 (1858)	4694両・永484文5分8厘8毛	1583両・永7文7分7厘	428両2分1朱・105貫272文	702石8斗7升
安政6年 (1859)	4981両・永499文9分2厘	1752両・永942文2分5厘	514両1朱・85貫155文	680石1斗8升
万延元年 (1860)	5267両・永540文4分6厘8毛	1679両・永156文5分4厘3毛	524両3分3朱・69貫389文	580石2斗7升
文久元年 (1861)	5718両・永934文5分2厘3毛	1692両・永497文2分2厘2毛	578両3分3朱・52貫565文	557石8斗1升
文久2年 (1862)	5365両・永793文5分2毛	1874両・永503文2分3厘	497両1分3朱・640文	640石5斗7升
文久3年 (1863)	6156両・永437文1分5厘2毛	1842両・永640文5分2厘2毛	508両1分・54文	643石5斗5升

和歌山大学経済学会『研究年報』第14号（2010年）

年 代	資 産	元 金	質 方 有 物	造 酒 米 高
元治元年 (1864)	6557両・永948文3分1厘9毛	1565両・永907文9分5厘9毛	652両1分・永619文4厘	663石4升
慶応元年 (1865)	6669両・永913文8分4厘	879両・永727文5分	974両2分1朱・491貫359文	667石5斗8升
慶応2年 (1866)	7666両・永377文8分4厘	1556両・永281文5分8厘	1374両3朱・367貫663文	414石3斗7升
慶応3年 (1867)	8286両・永453文7厘	1908両・永427文5分9厘	1298両3分3朱・158貫336文	286石3斗1升
明治元年 (1868)	8537両・永949文4分4厘	2122両・永740文2分7厘	806両2分3朱・184貫929文	441石9升
明治2年 (1869)	8696両・永905文4分2厘	2675両・永209文2分6厘	480両3朱・106貫711文	492石7斗1升
明治3年 (1870)	8901両・永415文4分4厘	3470両・永507文9分	56両3分・4貫503文	262石2斗4升
明治4年 (1871)	9879両・永372文9分4厘	3143両・永326文6分6厘	56両3分・4貫503文	473石6斗
明治5年 (1872)	8605両・永89文2分	3263両・永385文4分4厘	56両3分・4貫503文	567石6斗6升
明治6年 (1873)	9427両・永166文7分1厘7毛	3052両・永75文8分9厘	56両3分・4貫503文	613石7斗3升5合
明治7年 (1874)	9337両・永878文7分3厘	3244両・永99文3分3厘	34両3分3朱・4貫228文	537石5斗
明治8年 (1875)	9812両・永35文2分	3401両・永963文3分3厘	32両3朱・3貫802文	348石2斗
明治9年 (1876)	8577円44銭1厘3毛	3192円12銭5厘6毛	31円6銭7厘7毛	343石1斗5升
明治10年 (1877)	9564円87銭2厘1毛	2400円48銭4厘7毛		336石1斗5升
明治12年 (1878)	8038円60銭6厘4毛	1686円83銭7厘6毛		399石8斗3升
明治13年 (1879)	8951円96銭3厘8毛	2840円86銭7厘6毛		462石1斗5升1合
明治17年 (1884)	9790円78銭7厘3毛	4901円98銭7厘5毛		230石1斗
明治18年 (1885)	5430円35銭3厘8毛	4318円5銭5厘2毛		227石7斗
明治19年 (1886)	5214円5銭9厘5毛	4369円79銭3毛		274石3斗5升
明治20年 (1887)	6504円60銭3厘	4040円17銭9厘		220石2斗
明治21年 (1888)	6140円4銭7厘	4400円73銭4厘		293石6斗
明治22年 (1889)	6676円2銭9厘3毛	4077円61銭5厘		293石6斗
明治23年 (1890)	7133円47銭3厘5毛	4274円67銭1厘3毛		293石6斗
明治24年 (1891)	6766円78銭1厘8毛	4487円64銭7厘5毛		296石
明治25年 (1892)	6734円80銭1厘5毛	4515円74銭2厘		370石
明治26年 (1893)	7758円43銭4厘	5130円62銭4厘		414石4斗
明治27年 (1894)	9404円59銭5厘	5971円15銭6厘		444石
明治28年 (1895)	11840円93銭7厘	7288円50銭1厘		488石4斗
明治29年 (1896)	12809円8銭6厘	7651円7銭		488石4斗
明治30年 (1897)	18159円78銭8厘	9345円38銭		488石4斗
明治31年 (1898)	19338円80銭6厘	12121円5銭2厘		488石4斗
明治32年 (1899)	29475円33銭4厘	12938円10銭2厘		340石4斗
明治33年 (1900)	22527円24銭7厘	13503円48銭		399石6斗
明治34年 (1901)	24148円77銭1厘	14558円58銭1厘		440石4斗
明治35年 (1902)	25091円95銭7厘	15094円74銭2厘		367石
明治36年 (1903)	26198円65銭	15322円43銭8厘		337石6斗4升
明治37年 (1904)	27301円27銭5厘	16022円37銭4厘		367石
明治38年 (1905)	27906円66銭5厘	16712円48銭7厘		308石2斗8升
明治39年 (1906)	29043円95銭6厘	17553円63銭4厘		365石6斗
明治40年 (1907)	31392円97銭5厘	17989円76銭5厘		365石6斗
明治41年 (1908)	33658円51銭8厘	19767円19銭9厘		438石1斗6升
明治42年 (1909)	34062円69銭3厘	20879円2銭1厘		363石5斗
明治43年 (1910)	33438円36銭4厘	21341円24銭2厘		436石2斗
明治44年 (1911)	36055円63銭	21343円38銭2厘		464石2斗1升
大正元年 (1912)	38377円61銭4厘	23096円8銭6厘		507石9斗6升
大正2年 (1913)	35751円1銭7厘	22951円37銭		507石9斗6升
大正3年 (1914)	28450円6銭5厘	22019円9銭6厘		346石2斗
大正4年 (1915)	27571円78銭5厘	18562円23銭		370石7斗6升
大正6年 (1917)	35508円40銭5厘	16174円70銭6厘		541石1斗6升
大正12年 (1923)	65623円51銭3厘	37165円13銭5厘		626石4升
大正13年 (1924)	86974円8銭1厘	36405円71銭9厘		747石3斗6升
大正14年 (1925)	71244円54銭6厘	35690円63銭1厘		715石3斗4升
昭和元年 (1926)	69997円1厘	34190円63銭1厘		676石5斗
昭和3年 (1928)	82835円55銭1厘	30269円68銭9厘		590石1斗
昭和4年 (1929)	91260円72銭1厘	28747円93銭9厘		590石1斗
昭和5年 (1930)	103323円46銭2厘	28522円26銭7厘		680石8升

（注）各年の「造酒諸勘定目録」「諸勘定目録」「大勘定調」など（日野町史編さん室・栃木県立文書館寄託古村儀兵衛家文書）より作成。

その後も順調に増加し、天保2年には2031両余となり、この時期に質方の規模が拡大していったようである。天保期は、2200～2300両程度で推移するが、弘化期には徐々に低迷し、嘉永2年になると1722両余と、2000両を割り込むことになる。そして、その後は1700両前後を推移し、安政3年には1616両2分1朱・257貫447文にまで落ち込むのである。

要するに、酒造業がこの時期に順調に経営され、本店の資産額もそれと歩調を合わせて、増大していったのに対し、質方経営においては、文化期から文政期にかけて急激に増大し、天保期にピークを維持したものの、弘化期からしだいに減少していったことがわかる。そして、安政4年には、本店の資産額や元金と同様に、387両2分1朱・124貫711文と、前年の2割近くまで急激に落ち込むことになる。

なお、ここで吉村儀兵衛家の関東におけるこの時期の事業経営を、その輪郭がある程度明らかになる天保4年6月の「乍恐以書付奉申上候」⁽²⁸⁾によって見ておこう。この史料によれば、谷田貝町における百姓儀右衛門の持高は、「拾四石六斗五合」であり、居屋敷は表間口17間、奥行43間の広さをもつものであった。屋敷以外に、質物蔵が3か所（間口2間半×奥行7間、間口2間半×奥行5間、間口2間×奥行5間）、穀物蔵1か所（間口2間半×奥行5間）、酒造蔵1か所（間口8間×奥行12間）、酒火持蔵1か所（間口3間×奥行8間）、雑蔵1か所（間口2間半×奥行6間）と多くの蔵が並び、1か年の酒商内高として900両余、1か年の質物取高として2000両弱が掲げられている。ほかに、持添屋敷1か所（間口2間×奥行38間）、貸店にしている建家2軒、町内には上ノ店と思われる借出店1軒があり、出店では酒造商内や質物を少々取り扱っていた。それ以外に、芳賀郡鷺之巣村には出店1か所（鷺巣店）があり、そこでは酒造業と質物商売をしていた。このように、吉村儀兵衛家の経営は、酒造業を中心に質屋業を加えた事業を展開していたようすがわかる。

3 安政4年以降の経営動向

それでは、さらに安政4年以降の久下田店（本店）の経営動向を続いて表6によって見てみよう。安政4年の資産額は、4300両・永855文と前年の3分の1程度にまで落ち込んだのであるが、その後は順調な回復を見せる。万延元年（1860）には5267両余、文久3年（1863）には6156両余、慶応2年には7666両余、翌同3年には8286両余、明治4年（1871）には9879両余というように、着実に増加していった。明治9年からは円勘定となり、明治17年まで数年

(28) 天保4年6月「乍恐以書付奉申上候（酒造株願立ニ付家屋敷等書上）」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。この文書には、「六月」としか記されておらず、直接年号が付されていないが、同封の文書の年号が天保4年であり、天保4年と判断した。この文書には、別紙が2点付けられており、そこには、「本文酒造株之儀者、儀右衛門所持仕御上納金并冥加永共、当御役所江上納仕、出造稼中差遣置候、支配人召仕之者共者、是迄之通地元村方人別ニ差加置候様仕度奉願上候」「本文酒造売高金之儀ハ、当町株主善五郎酒造米高貳百石之分儀右衛門儀、当時借受酒造仕罷在候ニ付、儀右衛門酒造米高共四百貳拾六石六斗七升之売高ニ御座候」とある。

間欠年が見られるが、ほぼ9000円台で低迷する。そして、明治18年には松方デフレの影響で5430円余と落ち込むが、その後はゆっくりと回復し、明治28年には1万1840円余にまで及ぶ。明治30年代には2万円台、40年代には3万円台に上昇する。大正期に入ると、3万円前後で停滞するが、大正12年には6万5623円余、同13年には8万6974円余となり、その後一時7万円前後に少し落ち込むものの、昭和4年には9万円台を突破し、昭和5年には10万3323円46銭2厘に達する。

造酒米高については、安政4年以降は、減少ならびに停滞傾向を示す。安政4年の840石6斗8升をピークに、慶応元年までは600石台をどうにか維持する。その後明治6年に600石を上回る年も見られたが、毎年400石を切るような状態となる。明治10年代後半には200石台が同24年まで続き、それ以降は400石前後を維持する。⁽²⁹⁾大正期には500石台に回復し、大正13年には747石3斗6升となり、昭和5年までは600石前後を維持している。

元金は、資産額と同様に、前年の8518両余から安政4年には1514両・永792文9分7厘と急激な落ち込みを見せる。その後慶応3年まではほぼ1500～1900両とやや停滞するが、明治期に入ると順調に回復し、明治9年まで3000両台を維持する。明治10年代前半は2000円台で低迷するが、明治17～25年は4000円台、同28年には7000円台、同30年には9000円台、そして同31年には1万2121円5銭2厘に達する。その後も順調に伸び、明治42年には2万円台に及び、大正4年には2万円を切るが、大正12年には3万7165円13銭5厘とピークをなし、その後昭和初年に至るまで徐々に下げ、昭和5年には2万8522円余となる。

質物有物も、資産額や元金と同様に、前年の1616両余から安政4年には387両2分1朱・124貫711文へと急激な減少となる。その後、少しは持ち直すものの、元治元年には652両余にとどまり、慶応期には1000両を超えたが明治元年には806両余となり、同2年の480両3朱・106貫711文を最後に、同3年以降は60両以下となり、明治期に入り、質方稼ぎは廃業したようである。

近代以降の吉村儀兵衛家の動向について、簡単に述べておくと次のようになる。明治以降になると吉村儀兵衛家は、酒造業以外にも肥料を取り扱ったり、久下田銀行の設立に関与したり、公債や株式を所有したりして、多少の事業拡大を図っているが、⁽³¹⁾基本的には戦後の昭和末期に至るまで江戸時代以来の酒造業を経営の基軸として事業にあたっていた。⁽³²⁾⁽³³⁾⁽³⁴⁾

おわりに

以上、吉村儀兵衛家の関東での拠点となる久下田店（本店）の酒造経営を中心に、資本蓄積の動向を近代に至るまでできるだけ長期的に見てきたわけであるが、そこでは次のような

(29) 大正9年11月「商況概略」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）によれば、大正8年の蔵出789石3斗9升5合、売上金6万3372円38銭、同9年の蔵出684石5升2合、売上金6万8062円36銭とある。

(30) 近代の吉村儀兵衛家の動向については、前掲『二宮町史』通史編Ⅲ、249～270頁に述べられている。

ことが明らかになった。

第1に、吉村儀兵衛家が、関東へ第一歩を踏み入れたのは、元文4年であり、当初は帷子・日野椀などの持ち下り商いを行っていた。この時期には毎年13～14両の利益を得て、資本を蓄積しており、こうした資本を用いて、寛延2年に下野国芳賀郡久下田に店を設け、酒造業を開始した。

久下田店開店から天明元年までの33年間では、当初352両余の元金、257石余の酒造米、8両余の利金で出発するが、元金は、宝暦13年には400両、安永3年には600両、同9年には800両を超え、急激にその金額を増加させた。酒造米も明和8年には430石余、それ以降500～600石に増加し、天明2年には654石にまで及んだ。利金は、宝暦13年までは50両前後であったが、明和元年には100両を超える利金を獲得し、それ以降は毎年100両前後の利金を得

-
- ✓ (31) 吉村儀兵衛家が肥料商を営んでいたことが明示されるのは、明治20年12月の「秋勘定調」（明治18年「諸勘定目録」日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）において「肥物益金」として8円13銭4厘5毛、同21年3月の「春勘定調」（同）では「廿年度肥物益金」として84円9銭3厘が記載されているのが最初である。もちろんそれ以前の明治10年代の勘定帳に「羽粕」「肥物貸」「肥物方」などの文言も見える。明治30年「営業税課税標準額明細書」（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）には、「酒造及肥物業」、資本金8541円77銭5厘、従業員20人（営業主1人、番頭5人、営役者14人）とある。明治39年12月の肥料販売免許事項変更認可書も残されている（同）。明治42年12月の「酉之大勘定」（日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）では「肥料益」として643円93銭2厘、大正2年12月の「丑年大勘定」（同）では「肥料益」1150円89銭6厘、同4年の「大勘定下調」（同）では「肥料益」として1443円78銭1厘とあり、「大正六年度決算調」（同）では「肥料勘定」が別に設けられるようになっており、しだいに肥料商としてのウエイトも増加していったものと思われる。大正12年12月「大勘定調」（同）の「肥料勘定」では、7854円31銭の「益」とある。
- ✓ (32) 久下田銀行は、明治33年2月に資本金10万円で設立され、設立の中心は醤油醸造業・呉服太物商を営む竹村太左衛門家で、300株を引受け頭取となり、吉村儀兵衛家も150株を引受け、設立発起人に名を連ねている。前述したように、竹村家は蒲生郡鍬物師村に本拠地をもつ近江商人で、同家は吉村儀兵衛家と久下田町内で隣接して立地し、姻戚関係もある。実際、吉村儀兵衛家には、久下田銀行の「株式会社久下田銀行定款」や第1期～第10期の「営業報告書」が残されている（栃木県立文書館寄託吉村儀兵衛家文書）。久下田銀行の経営状況については、前掲『二宮町史』通史編Ⅲ 近現代（246～257頁）に詳しい。
- ✓ (33) 明治27年12月「午年大勘定」（明治18年「諸勘定目録」日野町史編さん室寄託吉村儀兵衛家文書）では、「鉄道創業費」3円、「軍事公債」103円、同29年3月「申之春勘定」（同29年「諸勘定目録」同）では「公債」398円、「株券」3円、同37年4月「辰之春勘定」（同）では「公債証書」1260円、「銀行株」3375円、「新聞株」100円、「国債」23円75銭、「大正六年度決算調」（同）では「資産」として「下館銀行公債金」200円、「久下田銀行一五〇株」4125円、「運送合資」200円、昭和3年「秋勘定調書」（同）では、「資産之部」として「公債」200円、「久下田旧株」7500円、「久下田新株」2000円、「東電株」1250円、「下野新聞旧」400円、「下野新聞新」200円とある。
- ✓ (34) 吉村家の代表銘柄は、同家の家紋である「ヨツメ」に由来する「ヨツメ正宗」であり、明治34～44年の売り上げは、年平均約512石の清酒を1万8567円50銭で販売しており、小売が少なく、卸売が85～91%を占めていたという。販路は、周辺の久下田町・長沼村・物部村が中心であるが、栃木県内の真岡町・中村、茨城県では下館町・河間村・中村・五所村・長方村・大泉村・水戸市などにも取引先を持っていたようである。昭和50年代頃には酒造から手を引き、委託販売を行っていたが、平成になると完全に醸造から離れたという（前掲『二宮町史』通史編Ⅲ、266～269頁）。

ていた。

第2に、天明元年～天保6年の55年間では、天明元年には1963両の元金が計上され、この時期にはある程度まとまった資金が蓄積されてきたが、寛政6年の2024両余に至るまで大きな増加は見られない。その後は順調に増加を続け、享和元年には3000両を超える額となり、文化10年には4000両を超えた。そして、文政9年には5000両、同12年には7000両、天保5年には9000両を超え、急激に資産を増加させ、同6年には1万両近くにまで達した。すなわち、文化期の後半から天保期にかけて、急激な成長を見ることができた。

文政11年～天保15年の17年間における吉村家の資産額も、文政11年に6532両余であった資産が、毎年500両程度も増加し、天保7年には1万両を超え、同10年には1万1424両余にまで達した。その後やや停滞したが、ほぼ1万両前後を維持していた。それと並んで質方有物も文政11年には1734両余と着実に増加し、天保3年には2000両を超え、その後天保15年まで2200～2300両前後を維持し、久下田店にとって質方稼ぎも酒造業と並び、吉村儀兵衛家の経営を安定させるのに寄与していた。

第3に、文化元年～安政4年の資産額を見ると、文化元年に2396両余あった資産が、文化8年には3000両を超え、同9～10年には2000両台に低下するものの、同11年以降は着実に増加し、文政元年には4000両、同9年には6000両、天保4年には9000両を超え、着実に資産の増加を図り、同7年には1万両の大病に乗った。その後9000両台にとどまるものの、弘化元年には再び1万両台を突破し、嘉永元年には1万2000両を超え、安政3年までほぼ1万2000両台を保ち、久下田店の最高額の資産を計上するに至った。ところが、安政4年には4300両余と急激に資産が減少した。その理由は、とりあえず家政改革などによる何らかの会計上の変更がなされたのではないかと推定した。

質方有物は、文化元年には455両余であったが、同11年には1114両余に達し、その後も順調に増加し、天保2年には2000両台にまで及び、この時期に質方の規模を拡大していったようである。天保期は、2200～2300両程度で推移するが、弘化期には徐々に低迷し、嘉永2年になると2000両を割り込み、安政3年には1616両余にまで落ち込む。酒造業がこの時期に順調に経営され、本店の資産額もそれと歩調を合わせて、増大していったのに対し、質方経営では、文化期から文政期に急激に増大し、天保期にピークを維持したものの、弘化期からしだいに減少していった。

第4に、安政4年に資産額は4300両余と前年の3分の1程度にまで落ち込んだが、その後は順調な回復を見せる。万延元年には5000両、慶応2年には7000両、明治4年には9000両を超えた。明治9年からは円勘定となり、ほぼ9000円台で低迷し、同18年には5430円余と落ち込む。しかし、その後は順調に回復し、明治28年には1万1840円余にまで及ぶ。明治30年代には2万円台、40年代には3万円台に上昇する。大正期に入ると、3万円前後で停滞するが、大正12年には6万5623円余、同13年には8万6974円余となり、その後一時7万円前後に少

し落ち込むものの、昭和4年には9万円台を突破し、昭和5年には10万3323円余に達した。

質物有物も、安政4年には387両余と急激に減少し、その後少し持ち直すものの、元治元年には652両余にとどまり、慶応期には1000両を超えたが明治元年には806両余となり、同2年の480両余を最後に、同3年以降は60両以下となり、明治期に入り、質方稼ぎは廃業したようである。

明治以降になると吉村儀兵衛家は、酒造業以外にも肥料の売買を行なったり、久下田銀行の設立に関与したり、公債や株式を所有したりしているが、基本的には戦後の昭和末期まで江戸時代以来の酒造業を経営の基軸とした事業を行っていた。

〔付記〕

本稿作成にあたっては、史料所蔵者である吉村儀兵衛家ならびに寄託先である日野町史編さん室、栃木県立文書館には、大変お世話になった。ここに深く感謝するしだいである。なお本稿は、平成20年度～平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「近江商人の経営と雇用形態に関する研究」による研究成果の一部である。